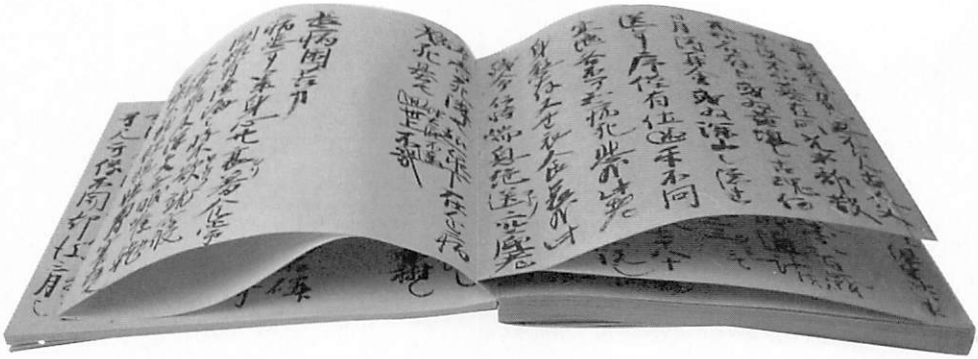
国文学研究資料館春季通常展示

和書のさまざま

―書誌学入門―



日本の文学・歴史・思想は、《本》という形で受け継がれて来た、といっても過言ではないでしょう。当展示では、《本》のさまざまな形態を体系的に紹介しながら、日本の古典籍がどのように読み伝えられて来たのかを御覧いただきます。当展示が、書誌学の入門としてのみならず、和書の魅力を感得していただく好機となれば幸いです。

◆目次◆

第一部　本を形づくるもの……2
A　装訂……2
B　書型……9
C　本の各部……12
D　料紙……23
第二部　さまざまな本の形……28
A　写本……28
B　版本……31
C　本以外の資料……38

※各書名の下に付した［　］内は、請求記号です。
※展示期間中、資料保護のため、展示替えを行うことがあります。ご了承下さい。

第一部　本を形づくるもの

A　装　訂

書物の製本の仕方を、装訂〈そうてい〉と言います。本の中身（内容）、製本の目的、料紙の性質、さらには個人の好みや当時の文化などにより、さまざまな装訂が行われます。

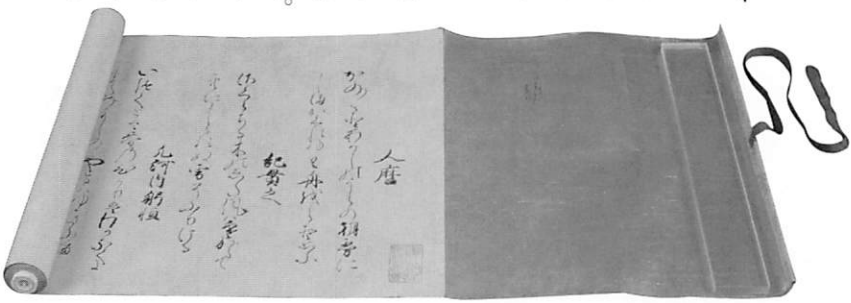
大きく、糊を使ってまとめる装訂（巻子本・折本・旋風葉・折帖仕立・画帖装など）と、糸を使って綴じる装訂（列帖装・袋綴など）とに分けることができます。当然、製本してから書写する本と、書写・印刷が終わってから製本する本とがあります。また、写本に多く見られる装訂と、版本に多く見られる装訂とがあります。

なお、「装丁」「装幀」と書かれることもありますが、「まとめる」「きちんとする」という意の「訂」を用い、「装訂」と表記するのが妥当とされています。

糊を使う装訂

巻子本〈かんすぼん〉

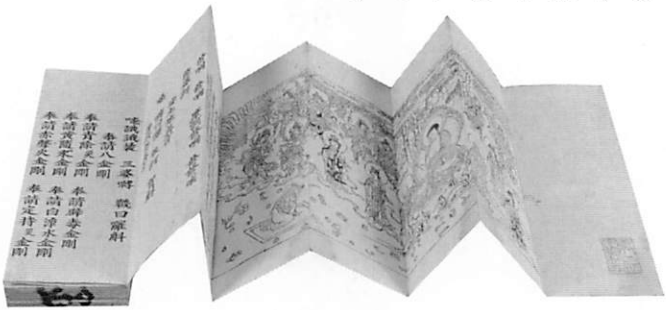
料紙の端裏〈はしうら〉と、次の料紙の端表〈はしおもて〉を貼り合わせて長く継いでゆき、最後の料紙の末端に軸〈じく〉を付けて巻き込んだ本。巻首には、表紙と巻き紐が付けられます。単位は「軸」で、一軸、二軸…と数えます。巻物〈まきもの〉とも呼ばれます。撰集の過程で切り継ぎをするのに便利な形です。ただ、繙読するには不便なため、冊子体の本や折本に改装されることもありました。また逆に、冊子体の本が巻子本に改装されることもまま行われました。



【1】三十六人歌合（江戸前期写）［31-105］

折本〈おりほん〉

料紙の端裏〈はしうら〉と端表〈はしおもて〉を貼り合わせて継いでゆき（ここまでは巻子本と同じ）、そのあと、一定の幅で折り畳んで、最初と最後のそれぞれに表紙をつけた本。単位は「帖」で、一帖、二帖…と数えます。帖装本〈じょうそうぼん〉とも呼ばれます。



【2】金剛般若波羅蜜経（寛永一三年1636版の後刷）［73-65］

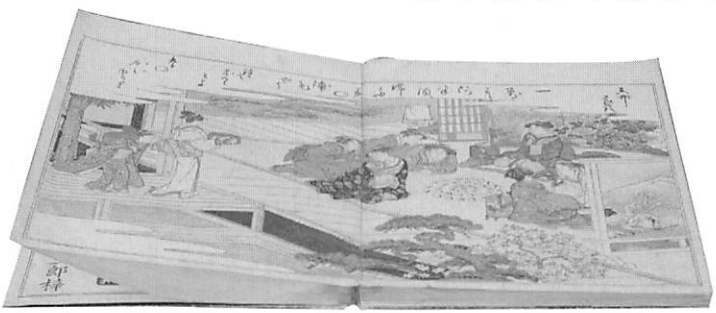
旋風葉〈せんぷうよう〉

折本の表表紙〈おもてびょうし〉と裏表紙〈うらびょうし〉とをつないだ本。折本の弱さを改良した形態と考えられます。単位は「帖」。開いたとき各葉がつむじ風に翻るように見えることからこの名があります。

折帖仕立〈おりじょうじたて〉
谷折りにした料紙を重ね、一方の端裏〈はしうら〉ともう一方の端裏〈はしうら〉どうしを糊付けして継いだ本。折本とは料紙の貼り合わせ方が異なります。裏面（糊付け部分のある方）は使用できません。古筆手鑑や法帖（金石文の拓本を帖にしたもの）などに見られる装訂です。単位は「帖」。

【3】集古帖（寛政五年1793～七年1795刊）［ヤ8-61-1～7］

画帖装〈がじょうそう〉
折帖仕立と同様の作りで、その背を表紙で覆った本（ですから、折帖仕立のように何丁にもわたって展開することができません）。絵を見開きで鑑賞するのに向き、江戸時代後期に普及しました。絵を伴った版本に多く見られます。単位は「帖」。



【4】潮干のつと（寛政元年1789刊）［ナ2-385］

粘葉装〈でっちょうそう〉

料紙を二つに折って複数重ねてゆき、それぞれの折目の外側どうしを糊付けして、背を表紙で覆って糊付けした本。完全に開く見開きと、糊付け部分までしか開かない見開きとが、交互に現れます。単位は「帖」。仏書・歌書などの古写本に多く見られる装訂です。一紙ごと書写した後に製本したと考えられます。

【5】極無自性勘文（文治四年1188写）［高乗勲文庫89-6］

糸を使う装訂

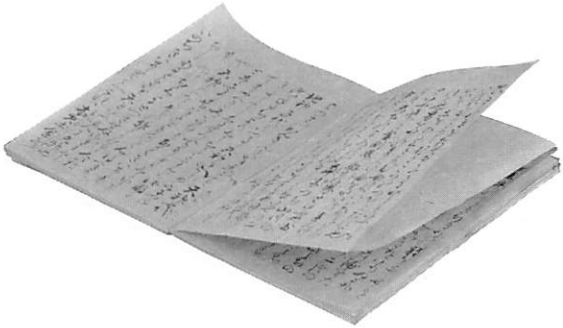
列帖装〈れつじょうそう／れっちょうそう〉

料紙を数枚～一〇枚ほど重ねてから二つ折りにし（これを一くくりという）、数くくりを重ね、折目の部分に穴を開けて糸で綴じ、表紙を付けた本。両面書写が可能なので、通常、料紙は厚手の斐紙が用いられます。歌書や物語の古写本に多く見られる装訂です。綴葉装〈てつようそう／てっちょうそう〉とも呼ばれます。単位は「帖」。ある程度製本した後に書写されたと考えられます。

【6】和漢朗詠集（江戸前期写）［サ1-2］

双葉列帖装〈そうようれつじょうそう〉・**折紙列帖装**〈おりがみれつじょうそう〉

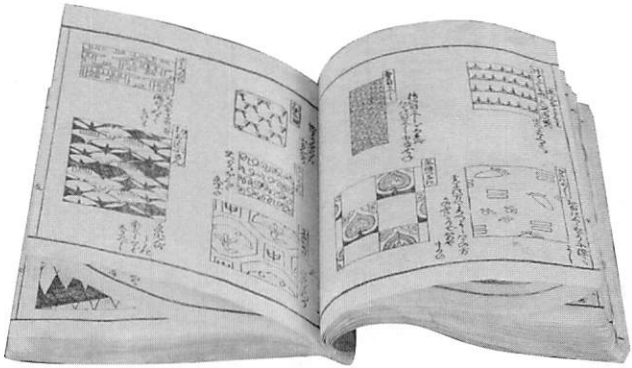
料紙を折り、さらにその折目を下端にして折り、列帖装に仕立てた本。両面書写に不向きな薄い楮紙〈ちょし〉を用いながら、かつ見栄えのよい列帖装にするために、こうした装訂がなされたと目されます。装訂が終わってから書き記されるため、日記などの帳面として用いられることもあります。単位は「帖」。



【7】伊勢物語髄脳（江戸初期写）［高乗勲文庫89-271］

袋綴〈ふくろとじ〉

二つ折りにした料紙を重ね、折目の反対側を綴じた本。仮綴をした後、表紙を付け、糸で綴じます。両面書写に向かない薄い楮紙の写本や、古活字版・整版は、多く、袋綴にされました。和書の代表的な装訂です。単位は「冊」で、一冊、二冊…と数えます。



【8】小紋雅話（寛政二年1790刊）［ナ4-637］

表紙の付け方

結び綴〈むすびとじ〉

列帖装や袋綴本に表紙をつける方法の一つ。表紙の右端から一センチくらいの所に穴を開け、紐や糸を通して結ぶ綴じ方。配り本・献上本などの装訂に多く用いられました。大和綴〈やまととじ〉と呼ぶ向きもあります。

【9】伊勢物語（江戸後期写）［初雁文庫12-398］

包背装〈ほうはいそう〉

仮綴をした袋綴本などの表裏を、一枚の表紙でくるみ、背を糊付けする装訂。くるみ表紙・包み表紙とも呼ばれます。

【10】三体詩抄（寛永元年1624写）［79-41］

綴じ方のいろいろ

四つ目綴〈よつめとじ〉

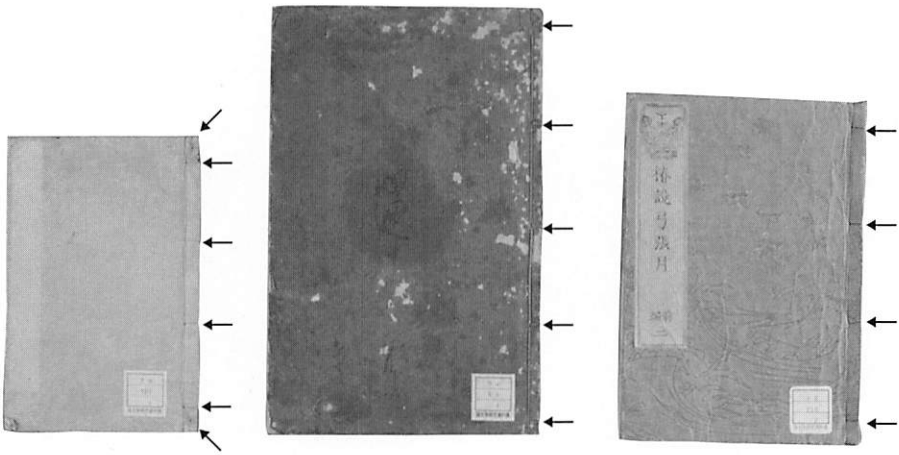
袋綴本などを綴じる代表的な方法です。室町時代以後主流になった綴じ方といわれています。明朝綴〈みんちょうとじ〉・四針眼訂法〈ししんがんていほう〉とも呼ばれます。

朝鮮綴〈ちょうせんとじ〉

袋綴本で、綴じ穴が五つのもの。朝鮮刊本など大型の本に用いられました。五針眼訂法〈ごしんがんていほう〉とも呼ばれます。

康熙綴〈こうきとじ〉

袋綴本で、綴じ穴が六つのもの。中国清代の康熙年間に流行したので、この名があります。六針眼訂法〈ろくしんがんていほう〉とも呼ばれます。



【11】椿説弓張月（江戸後期刊）［ナ4-218］
【12】釈迦の本地（寛永二〇年1643刊）［タ4-58］
【13】百名家書画帖（天保八年1837刊）［ヤ8-109］

仮綴〈かりとじ〉
きちんとした表紙を付けずに、本文の料紙だけを綴じたもの。草稿や雑記などをまとめておく方法の一つです。

紙釘装〈していそう〉
袋綴本の仮綴として用いられました。重ねた料紙の右側に穴を開け、太めのこよりを通し、こよりのはみ出した部分を叩いてつぶして固定する綴じ方。

【14】自讃歌（室町中期写）［72-23］
【15】長恨歌（室町後期写）［73-99］

B 書型

本の大きさのことを、書型〈しょけい〉と言います。平安～鎌倉時代の古写本の場合、通常、斐紙や斐楮交漉紙を、二等分もしくは三等分し、さらにそれを二つ折りにして用います。二等分した料紙を二つ折りにしたものは縦長の本（四つ半本）になり、三等分した料紙を二つ折りにしたものは枡形の本（六つ半本）になります。

また、江戸時代の版本の場合、通常、美濃紙（約二八センチ×約四〇センチ）もしくは半紙（約二四センチ×約三三センチ）を元にし、これを折ったり切ったりして用います。美濃紙を元にしたものが大本・中本・横中本になり、半紙を元にしたものが半紙本・小本・横小本になるというわけです。

なお、横中本・横小本・懐中本などを含め、横型の本をまとめて横本と総称します。

古写本の書型

四つ半本〈よつはんぼん〉
斐紙を二等分し、それを二つ折りにした大きさの本。平安～鎌倉時代の歌書や物語に多く見られます。

六つ半本〈むつはんぼん〉**枡形本**〈ますがたぼん〉
斐紙を三等分し、それを二つ折りにした大きさの本。ほぼ正方形（枡の形）であるので、枡形本と呼ばれます。平安～鎌倉時代の歌書や物語に多く見られます。

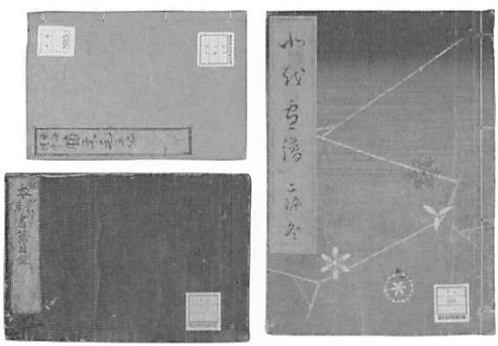
【16】和歌作法（南北朝期写）［橋本進吉旧蔵書88-5］
【17】阿仏のふみ（室町中期以前写）［タ5-128］

版本の書型―美濃判をもとにしたもの―

大本〈おおぼん〉
美濃判〈みのばん〉の紙を二つ折りにした大きさの本。現在のB5判大学ノートに近いサイズです。

中本〈ちゅうぼん〉
大本の半分の大きさの本。草双紙・合巻や、後期滑稽本・後期洒落本などに見られます。

横中本〈よこちゅうぼん〉中本と同じ大きさの横本。地理案内書・人名録・紋様帳など実用向きの本に見られます。



【18】北越雪譜（天保七年1836刊）［ヤ6-249］
【19】東海道中膝栗毛（江戸後期刊）［ナ4-61］
【20】本朝書籍目録（寛文一一年1671刊）［ヤ0-15］

版本の書型―半紙判をもとにしたもの―

半紙本〈はんしぼん〉
半紙を二つ折りにした大きさの本。談義本や読本、絵本類などに見られます。現在の菊判の本に近いサイズです。

小本〈こぼん〉
半紙本の半分の大きさの本。洒落本などに見られます。

横小本〈よここぼん〉
小本と同じ大きさの横本。地理案内書や趣味的な案内書に多く見られます。

【21】絵本吾嬬鏡（天明七年1787刊）［ヤ6-186］
【22】傾城買四十八手（寛政二年1790刊）［ナ4-309］
【23】みちしるべ（元禄三年1690刊）［ヤ6-180］

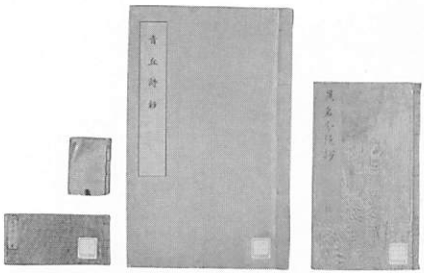
標準規格以外の書型

縦長本〈たてながぼん〉
大本や半紙本と比べ、横の長さが特に短い本。清朝の唐本や朝鮮本に多く、日本でも、寛永（1622-1644）頃から、中華趣味の内容を持つ本に、この書型が用いられました。

特大本〈とくおおぼん〉
大本より大型の本。規格外の特殊な書型と見られます。大型本とも呼ばれます。

特小本〈とくこぼん〉
小本より小型の本。豆本〈まめほん〉・寸珍本〈すんちんぼん〉・袖珍本〈しゅうちんぼん〉とも呼ばれます。

懐中本〈かいちゅうぼん〉 袖や懐に収まる、細長い横型の本。



【24】異名分類抄（寛政五年1793刊）［マ4-2］
【25】青丘詩抄（大正四年刊）［ラ4-1］
【26】古今和歌集（享保二年1717刊）［ラ6-20］
【27】諸国道中旅日記（安政三年1856刊）［ラ8-19］

C　本の各部

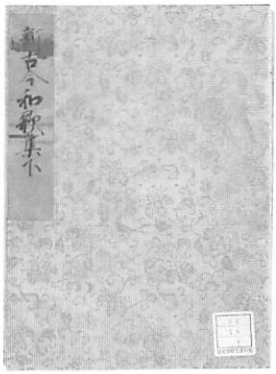
本の外側は、さまざまな装いの表紙で覆われ、題名が直書きされたり題簽が貼られたりしています。また、本の内部にも、作品そのものとは別に奥書が記されたり刊記が印刷されたりすることがあります。時には、書写者や所蔵者が、朱書きをしたり付箋を貼ったり、蔵書印を捺したりする場合もあります。それらは、作品の成立や、書写・出版の経緯を示すだけでなく、その本が今日までどのように読まれ伝えられて来たのかということをも明らかにしてくれます。

表紙〈ひょうし〉

裂表紙〈きれびょうし〉（布表紙）と紙表紙〈かみびょうし〉とがあります。本を保護するためだけでなく、意匠としての意味も持っていました。美麗な裂表紙には、錦〈にしき〉・繍〈ぬいとり〉・緞子〈どんす〉などが用いられました。また、紙表紙でも、丹色〈にいろ〉や栗皮色〈くりかわいろ〉のもの、紺地に金泥〈きんでい〉を施したものなど、実に多様です。江戸時代後期には美麗な錦絵〈にしきえ〉を印刷した刷付け表紙も出されました。

◎**金襴表紙**〈きんらんびょうし〉
横糸に金糸を用いて紋様を出した絹織物（金襴）を表紙に用いたもの。歌書や物語などの写本に多く見られます。

◎**紺地金泥表紙**〈こんじきんでいびょうし〉
藍を染料にして紺色に濃く染めた紙に、金や銀の泥〈でい〉で下絵を描いたもの。歌書や物語などの写本に多く見られます。



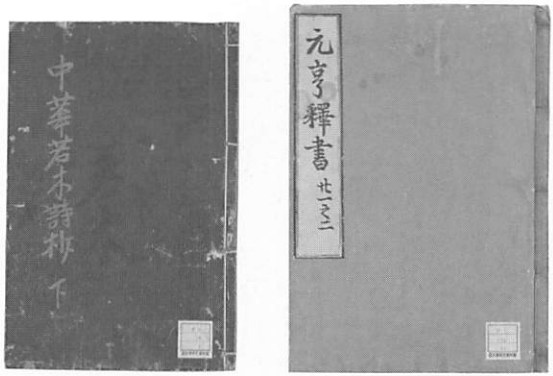
【28】新古今和歌集（江戸前期写）［タ2-15］
【29】古今口伝秘抄（室町初期写）［初雁文庫12-161］

◎**丹表紙**〈たんびょうし〉

丹色〈にいろ〉（鮮やかな赤橙色）の無地の表紙。寛永期（1624-1644）前後の整版・古活字版に見られる特徴的な表紙で、後世も珍重されました。

◎**栗皮色表紙**〈くりかわいろびょうし〉

栗の実の皮のような、光沢のある濃褐色の表紙。寛永期（1624-1644）前後の古活字版や整版に見られる特徴的な表紙です。



【30】元亨釈書（寛永元年1624跋）［ヤ1-178］
【31】中華若木詩抄（正保四年1647刊）［タ8-4］

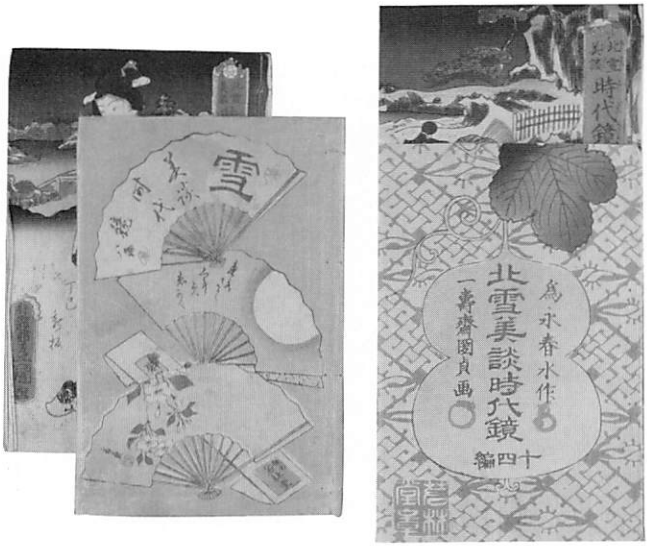
◎**刷付け表紙**〈すりつけびょうし〉

合巻〈ごうかん〉などの表紙全面に、重ね刷りの技法で、美麗な錦絵を刷り出したもの。

【33】花兄魁綴紙（天保六年1835刊）［ナ4-404-13～15］

書袋〈しょたい〉

本を入れる紙の袋。本を店頭に並べて発売する際などに用いられました。享保年間（1716-1736）から行われ、江戸時代後期には、洒落本・黄表紙・吉原細見などが袋入りで売られていました。



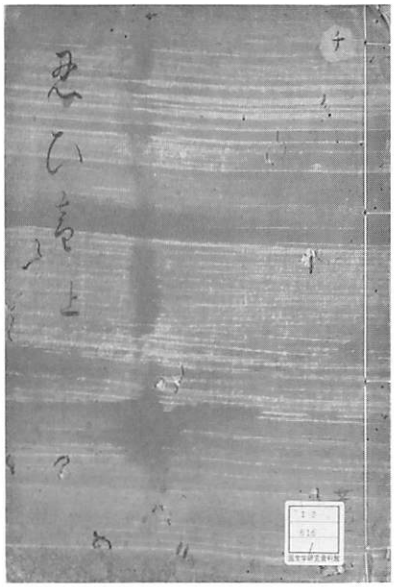
【34】時代加々見（慶応四年1868刊）［ナ4-40］

外題〈げだい〉

本の表紙に記されている書名のこと。直接表紙に記された「書き外題」「打付外題」と、書名の記された題簽が貼られた「貼り外題」との二種類があります。

◎直書き〈じかがき〉・打付書き〈うちつけがき〉

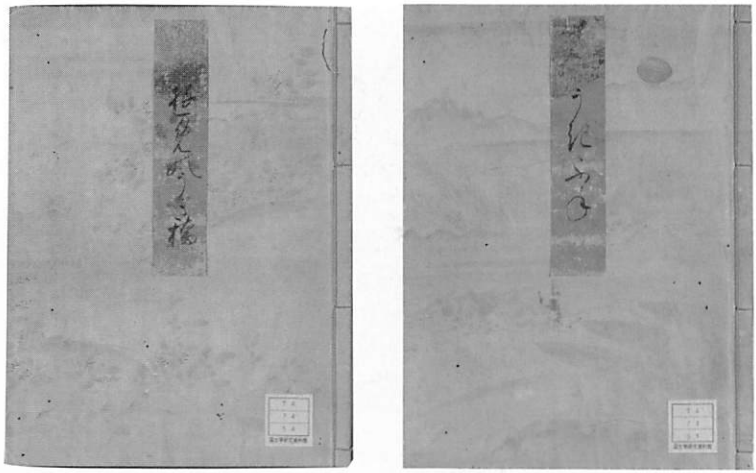
表紙に直接、書名や巻数を書いたもの。平安～鎌倉時代、書名は、多く、表紙の中央に直書きされていたようです。



【36】しのびね物語（江戸中期写）［初雁文庫12-616］

◎書き題簽〈だいせん〉

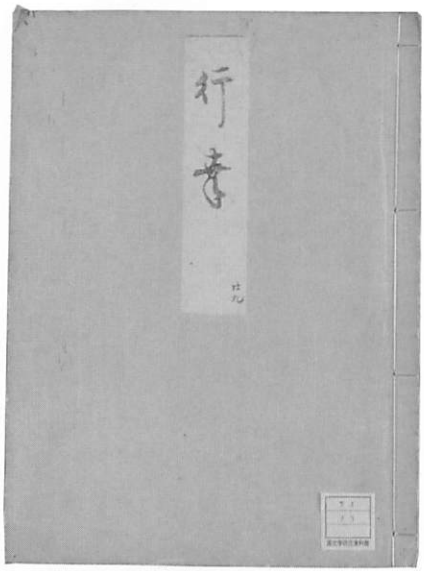
書名や巻数などを記した紙片で、表紙の左上や中央に貼り付けたもの。通常、写本に貼られる題簽です。



【37】源氏物語（江戸前期写）［ナ4-74］

◎刷り題簽〈だいせん〉

書名や巻数などを記した紙片で、表紙の左上や中央に貼り付けたもの。通常、版本に貼られる題簽です。



【39】伝嵯峨本源氏物語（慶長期1596-1614古活字版）［ナ4-73］

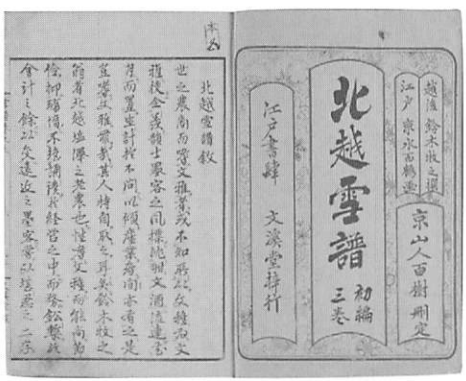
◎**絵題簽**〈えだいせん〉　書名のほかに絵を入れた題簽。絵外題とも呼びます。江戸時代の絵入小説に多く用いられました。

【40】唯頼大悲智慧話（寛政九年1797刊）［ナ4-297］

内題〈ないだい〉

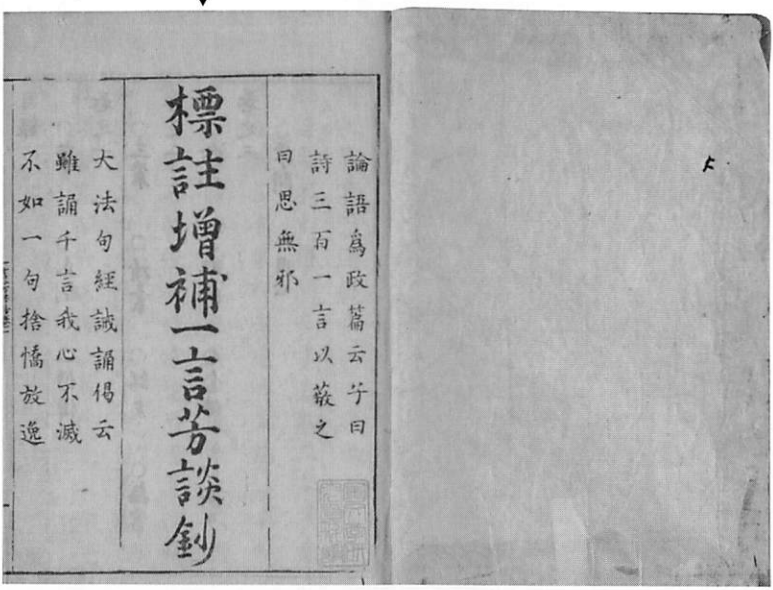
外題に対し、本の内側に書かれた書名を内題と呼びます。以下のようにさまざまな種類がありますが、通常、巻首題を内題として採用します。成立や出版の事情で、一つの本の中でも、外題と内題、各種の内題が一致しない場合があります。

◎**見返題**〈みかえしだい〉
見返（表紙の裏面に貼られた紙の部分）に記載されている書名。



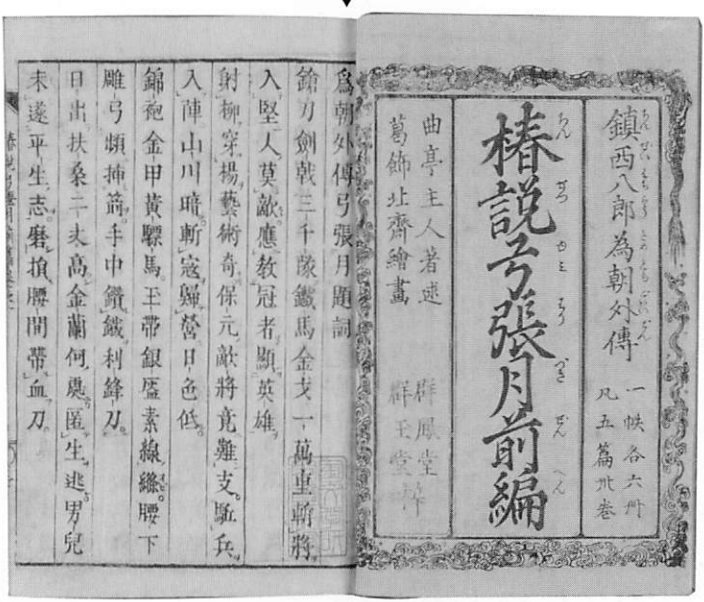
【42】北越雪譜（天保七年1836刊）［ヤ6-249］

◎扉題〈とびらだい〉
巻頭第一丁目の表側に記載された書名。



【43】一言芳談（元禄二年1689刊）［ナ4-22］

◎序題〈じょだい〉
序文の冒頭（序首）に記載された書名。

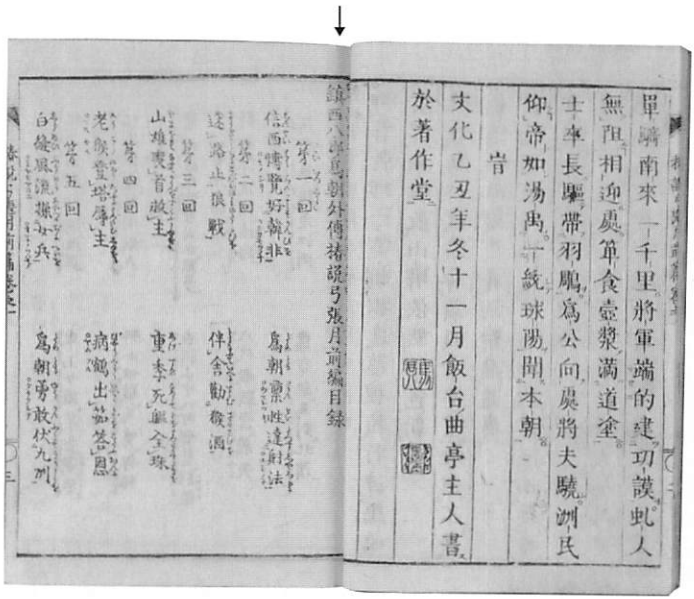


【44】椿説弓張月（江戸後期刊）［ナ4-218］

◎目録題〈もくろくだい〉

目録（目次）の冒頭に記載された書名。

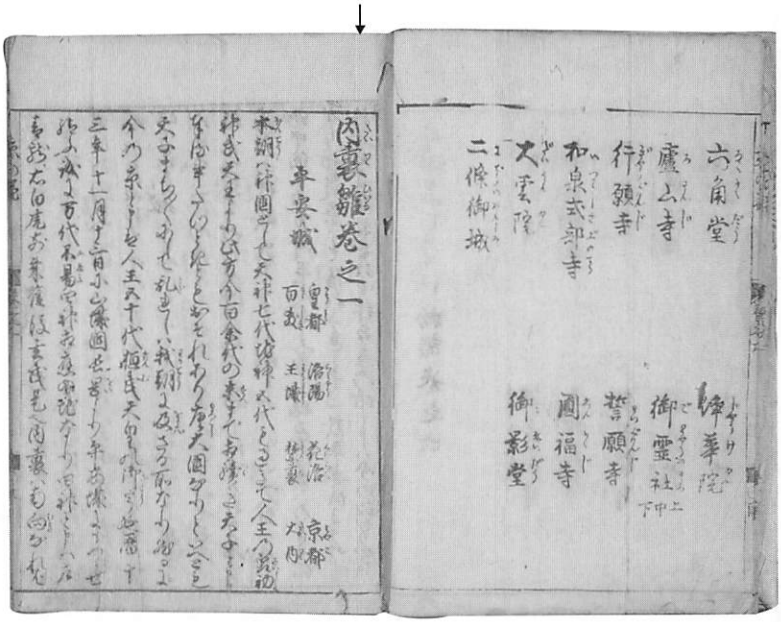
※本書の場合、序題は「為朝外伝弓張月」、目録題は「鎮西八郎為朝外伝椿説弓張月」、外題・柱題・尾題は「椿説弓張月」となっています。



【44】椿説弓張月（江戸後期刊）［ナ4-218］

◎巻首題〈かんしゅだい〉

本文の冒頭に記載された書名。



【45】山城名所寺社物語（宝暦七1757年版の後刷）［ナ6-31］

◎**柱題**〈はしらだい〉

袋綴本の版心〈はんしん〉（折目を中心とした1・2センチ幅）に記載された書名。

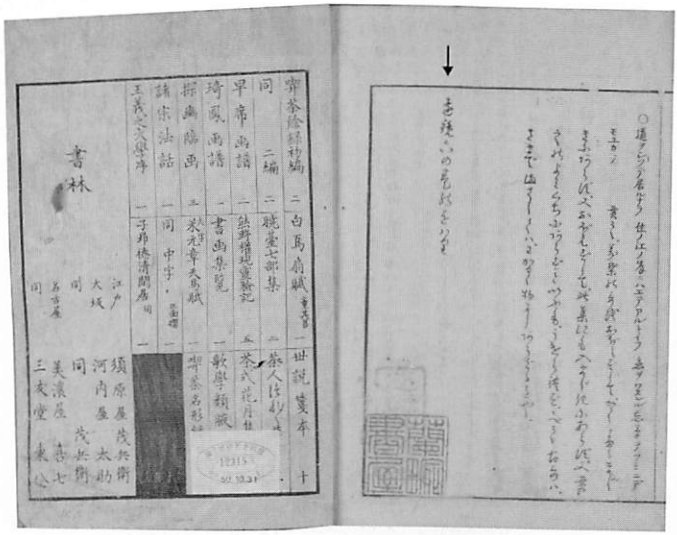
※本書の場合、巻首題は「内裏雛」、柱題は「京の花」、外題（題簽）・目録題は「山城名所寺社物語」となっています。

【45】山城名所寺社物語（宝暦七1757年版の後刷）［ナ6-31］

◎**尾題**〈びだい〉

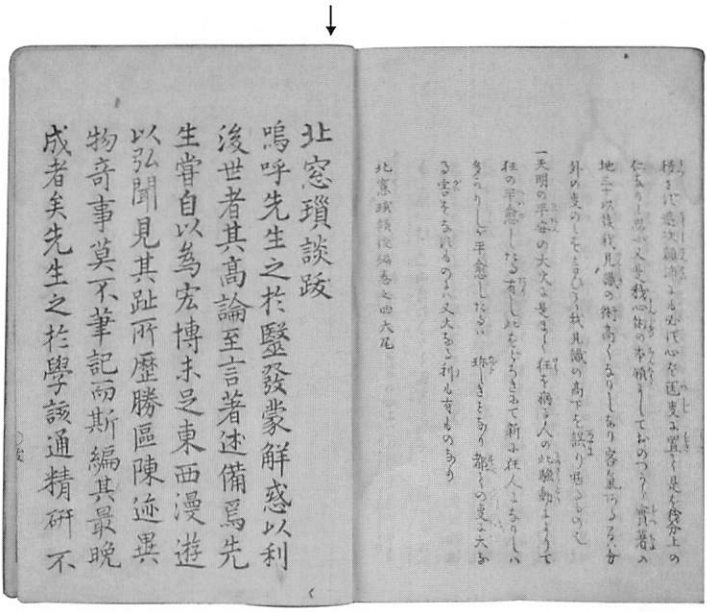
編や巻の最後に記載された書名。

※本書の場合、尾題は「遠鏡」「遠かゞみ」「とほかゞみ」、外題は「古今集遠鏡」、巻首題は「古今和歌集遠鏡」「古今和歌集遠鏡」となっています。



【46】古今和歌集遠鏡（江戸後期刊）［サ2-4］

◎**跋題**〈ばつだい〉
跋文（編著の次第を巻末に付記したもの）に記載された書名。

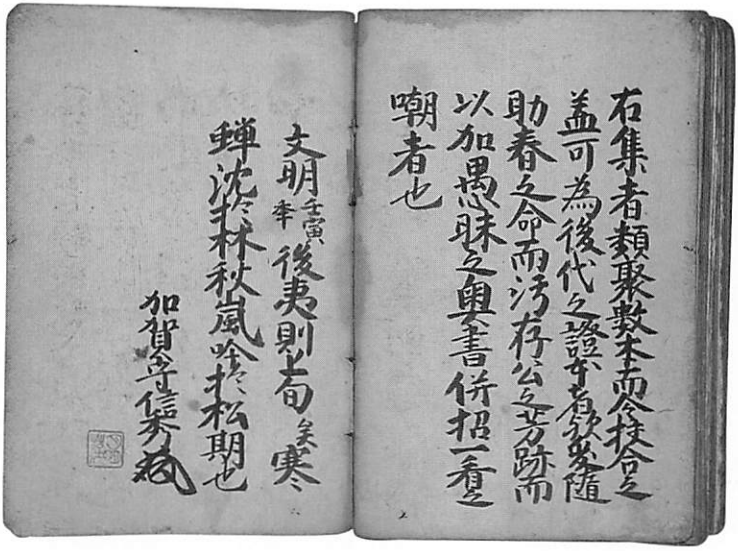


北窓瑣談跋

嗚呼先生之於醫發蒙解惑以利
後世者其高論至言著述備寫先
生嘗自以爲宏博未足東西漫遊
以弘聞見其趾所歷勝區陳迹異
物奇事莫不筆記而斯編其最晚
成者矣先生之於學該通精研不

【47】北窓瑣談（文政一二年1829刊）［ナ5-36］

奥書〈おくがき〉
本文の末尾に記された文章。書写者や校合者などが、成立・書写・校合・伝来について記したものを言います。



右集者類聚數本而令校合之
蓋可爲後代之證本者歟然隨
助春之命而汚存公之芳跡而
以加愚昧之奥書併招一看之
嘲者也

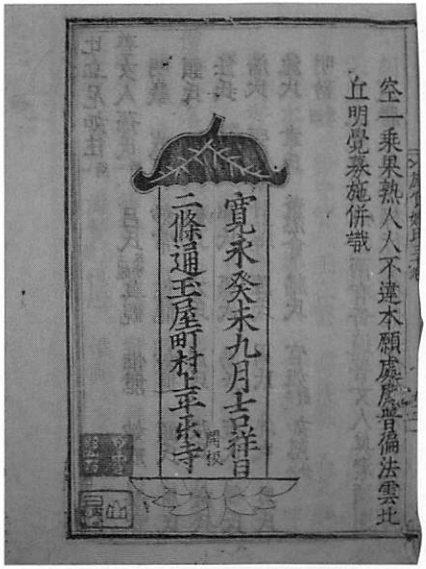
文明壬寅年後夷則旬之寒
蟬沈林秋嵐吟於松期也
加賀守信秀

【48】加賀守信秀写　新古今和歌集（室町中期写）［懐風弄月文庫92-12］

刊記〈かんき〉

版本巻末で、刊行年月・刊行者名・その居住地などを記したもの。本文や跋の後にそのまま続けて記したものを「刊記」と呼び、一方、別の丁（裏見返しなど）に記されるものを「奥付〈おくづけ〉」と呼んで区別します。

※「寛永癸未」は、寛永二〇年（1643）。「村上平楽寺」は、村上勘兵衛。仏書を中心に医書・歌書等を刊行し今に至る書店です（平楽寺書店）。

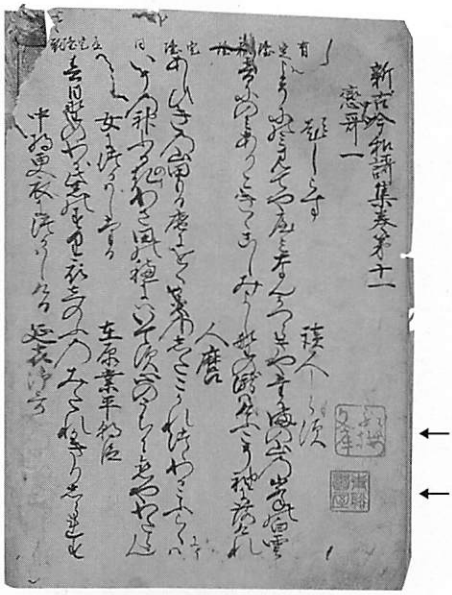


【49】天目中峯和尚広録（寛永二〇年1643刊）［73-101］

蔵書印〈ぞうしょいん〉

所蔵を表すために捺した印。その本の伝来や素姓を知る上で役立ちます。

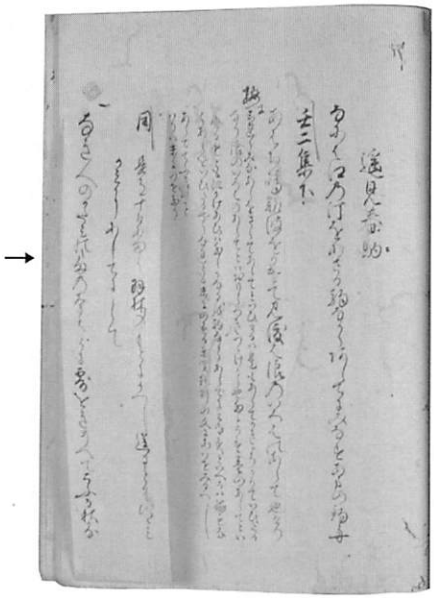
※印記「紅梅文庫」（前田善子氏）・「青谿書屋」（大島雅太郎氏）



【50】新古今和歌集（室町中期写）［懐風弄月文庫92-46］

付箋〈ふせん〉

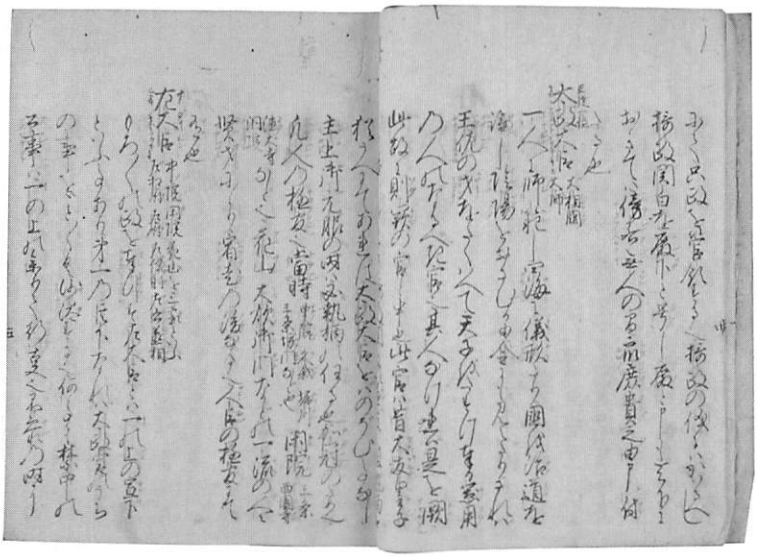
疑問箇所や注意部分に貼付される小紙片で、注釈・典拠などを記したもの。紙片の上端部に糊が付けてあります。なお、紙片全体を糊付けしたものは、「押紙〈おうし〉」と呼びます。



【51】古今要覧稿（江戸後期写）［ヤ9-159］

朱書き〈しゅがき〉

校異・訂正・訓点・出典・注釈などを朱で書き入れたもの。「朱書〈しゅしょ〉」とも言います。

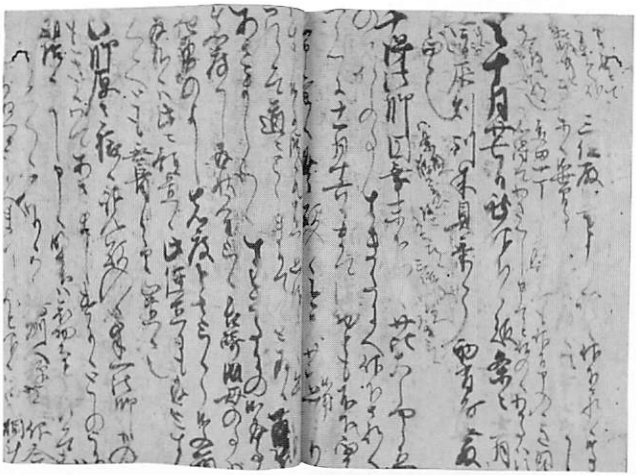


【52】百寮訓要抄（宝永元年1704朱点）［ヤ7-51］

紙背〈しはい〉

古くは紙が貴重だったので、手紙などに用いた紙の裏を利用して本を作ることがありました。この新しく作られた文書の表面に対し、裏になった部分を紙背文書と言います。

※本書には、永仁元年（1293）写の奥書と、徳治二年（1307）の識語があります。紙背にある文書はその直前のものと考えられます。



【53】勝語集（鎌倉前期写）［ヤ4-49］

D 料紙

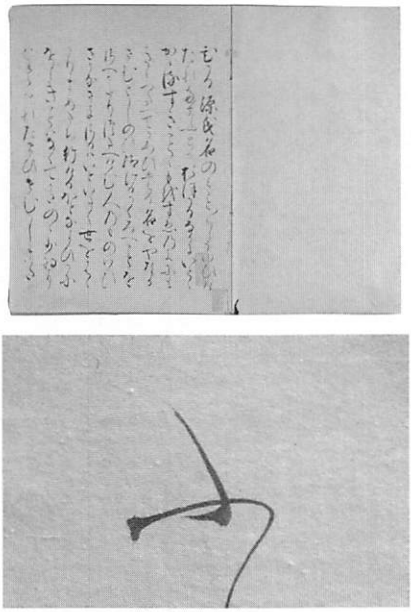
用紙のこと。原料のほとんどは植物繊維です。

和紙の原料として伝統的に用いられて来たのは、楮〈こうぞ〉と雁皮〈がんぴ〉です。それから作られた楮紙・斐紙（雁皮紙）、および斐楮交漉紙は、和書の代表的な料紙です。その他、麻〈あさ〉・檀〈まゆみ〉・三椏〈みつまた〉などが原料になることもあります。いずれも、製本の目的・書物の用途・作品の性質、利便性・経済性などさまざまな理由により、さまざまに用いられています。

また、さらに、墨の乗りを考慮して、楮紙を木槌で打って平滑にした打紙〈うちがみ〉が用いられることもありましたし、見栄えを考慮して、紙を染める・箔を散らす・雲母を摺り出すなどの意匠を凝らした装飾料紙が用いられることもありました。

斐紙〈ひし〉

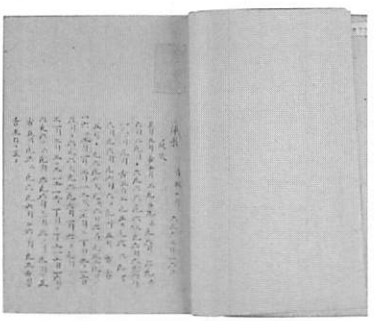
雁皮紙〈がんぴし〉とも呼びます。緊密で光沢があり丈夫です。両面書写に適するので、列帖装の歌書や物語などに多く見られます。斐紙のうち、特に、鶏卵のような淡黄色・黄褐色を呈する厚様〈あつよう〉の料紙を鳥の子〈とりのこ〉と言います。

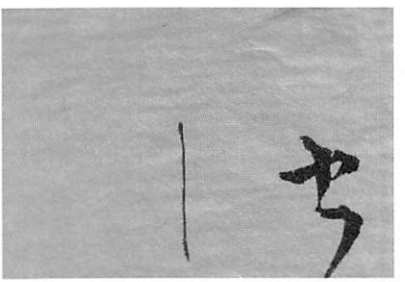


【54】源氏物語　総角巻（江戸初期写）［サ4-81］

薄様〈うすよう〉

斐紙を薄く漉いた料紙。

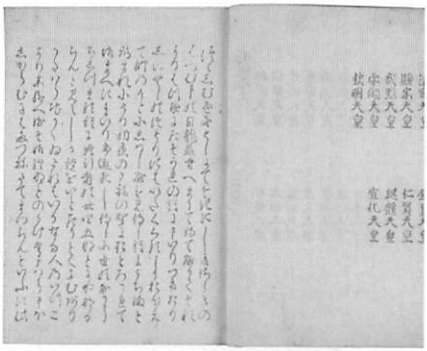


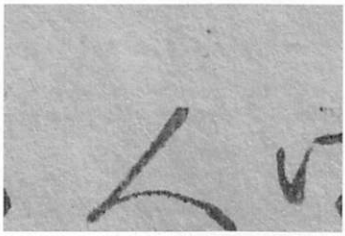


【55】神楽譜（天明三年1783写）［初雁文庫12-9］

楮紙〈ちょし〉

楮〈こうぞ〉の繊維で製した料紙。日本の本の材料としてはもっとも代表的なものです。このうち、厚手できめの細かい白色のものを奉書紙〈ほうしょがみ〉、厚手で縮緬のような皺のあるものを檀紙〈だんし〉と呼びます。

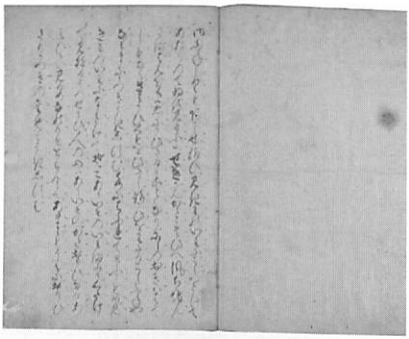




【56】水鏡（元和-寛永期1615-1643古活字版）［タ4-25］

斐楮交漉紙〈ひちょまぜすきがみ〉

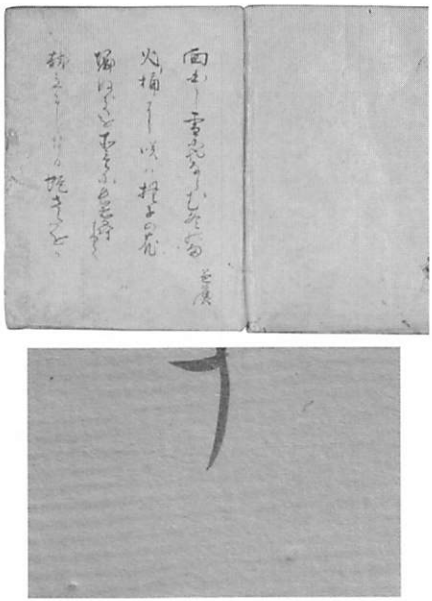
斐紙が高価であるため、それに楮を交ぜて漉いた料紙。



【57】舞の本（江戸初期写）［ラ1-10］

間似合紙〈まにあいがみ〉

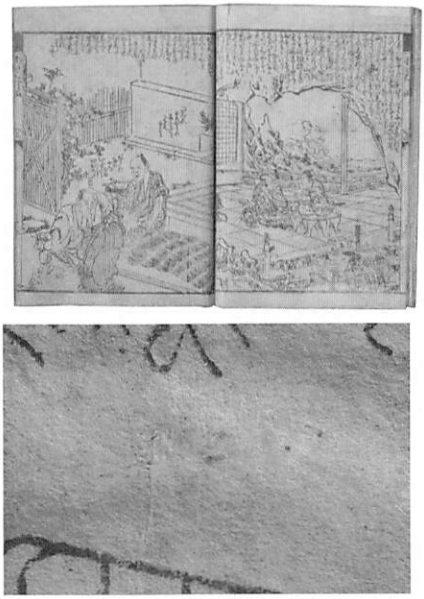
斐楮交漉紙に石粉や泥土などを混入して加工した料紙。



【58】細川重賢公他百韻付句（安永六年1777写）［ナ2-419］

宿紙〈しゅくし〉・**漉返**〈すきかえし〉

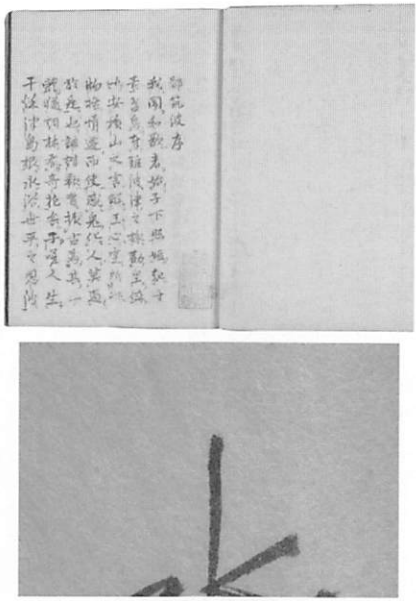
反故紙を再び漉き返して作った料紙。それまで書かれていた墨が混じってしまうため、薄灰色になっています。紙質は粗悪です。



【59】敵討安達太郎山（江戸後期刊）［ナ4-142］

三椏紙〈みつまたがみ〉

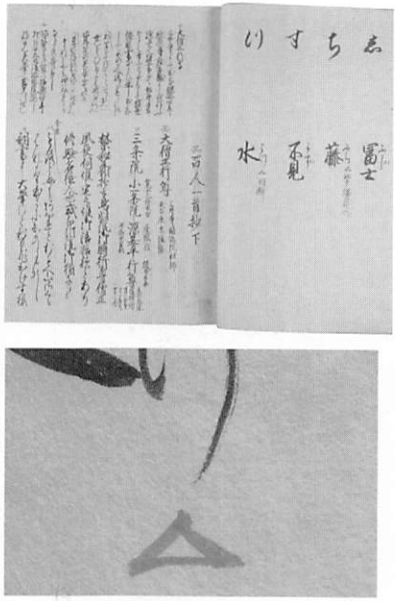
三椏を原料として漉いた料紙。楮紙より薄く弱いものの、繊維が目立たず白く滑らかな良質紙であるため、斐紙の代用としても使われました。幕末期に広く普及しました。



【60】ひなつくば・誹学校（明治期写）［ナ3-14］

打紙〈うちがみ〉

墨付き・墨色をよくするため、生紙に湿り気を与えて木槌で打ち平滑にしたもの。楮紙・斐紙に対して行います。



【61】百人一首抄（江戸前期写）［ナ2-482］

第二部　さまざまな本の形

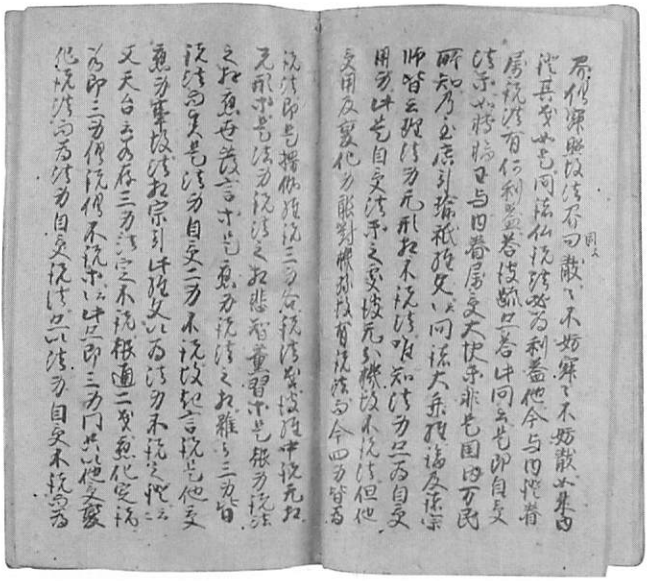
A　写　本

印刷された版本（刊本）に対し、手で書かれた本を、写本〈しゃほん〉と言います。

作者自身の手になる自筆本・手稿本（草稿本）・清書本（浄書本）も写本の類に加えますが、写本と言う場合、多くは転写本のことを指します。転写の仕方によって、親本の書体や字配りまで忠実に模したものは臨模本〈りんもほん〉、親本の上に紙を置いて透き写したものは透写本（影写本）と呼びます。また、特に、天皇自らが書写したものを宸翰本〈しんかんぼん〉、親王・皇親の書写したものを御筆本〈ぎょひつぼん〉と呼ぶこともあります。

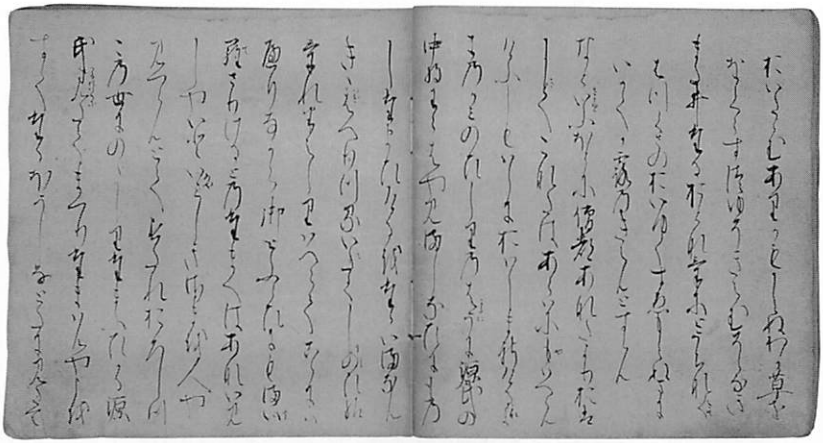
また、室町時代末期までに書写されたものを古写本、江戸時代に書写されたものを近写本、明治以降に書写されたものを新写本と呼んで区別する場合もあります。

なお、現存する日本最古の写本は、推古二三年（615）頃の、聖徳太子の筆になる『法華義疏〈ほっけぎしょ〉』だと言われています。



【62】教時義（平安末期写）［高乗勲文庫89-4］

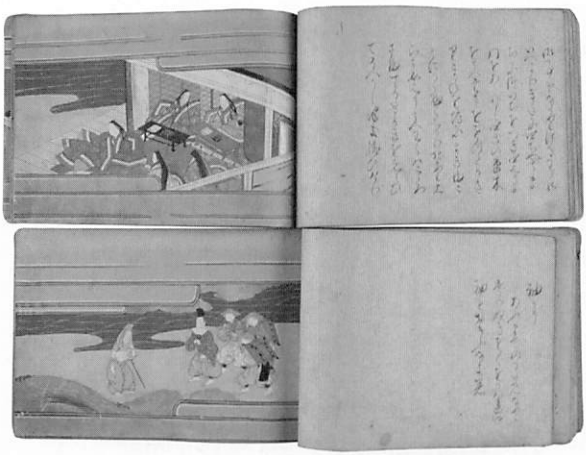
鎌倉時代の写本



【63】伝藤原為家筆　源氏物語（鎌倉中期写）［橋本進吉旧蔵書88-22］

奈良絵本〈ならえほん〉

室町時代中期から江戸時代前期までの間に作られた奈良絵入りの写本。巻子本のものと冊子本のものとがあります。天地に水色か金砂子の雲霞を引くのが特徴です。お伽草子・幸若・古浄瑠璃・寺社縁起・軍記物など、主に上流女性の観賞用に作られていました。

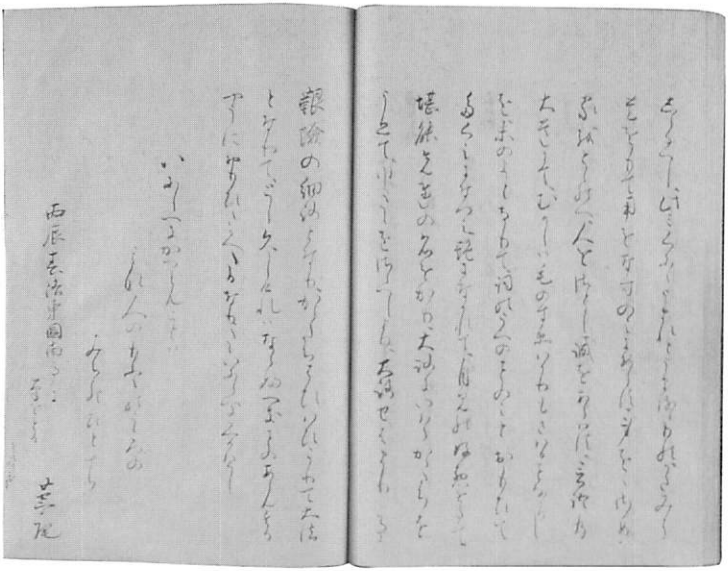


【64】文正草子（江戸中期写）［ゆ4-56］

稿本〈こうほん〉

草稿・下書きのこと。

※寛政八年（1796）に成った小沢蘆庵自筆の草稿本

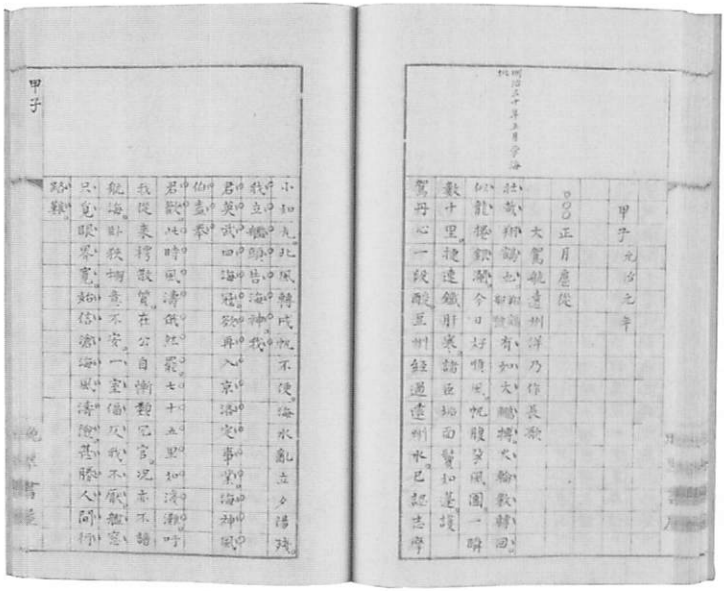


【65】小沢蘆庵自筆　振分髪（寛政八年1796写）［ナ2-327］

浄書本〈じょうしょぼん〉・清書本〈せいしょぼん〉

草稿をまとめ書き直した本。

※明治三〇年（1897）頃、杉浦梅潭が自身の漢詩をまとめた浄書本



【66】梅潭詩鈔（明治三〇年頃写）［杉浦梅潭文庫83-75］

B 版本

手で書いた写本に対し、印刷した本を、版本〈はんぽん〉と言います。刊本〈かんぽん〉とも呼ばれ、「板本」と表記されることもあります。活字を用いる古活字版と、板に彫刻した版木を用いる整版とに分けられます。

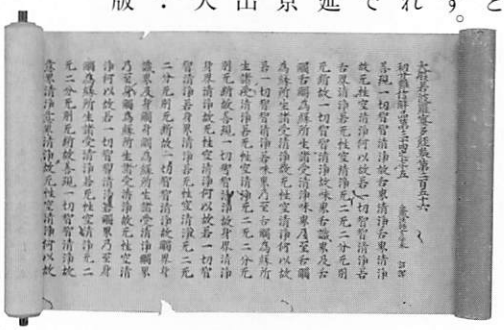
日本の印刷は、奈良時代、神護景雲四年（770）に完成した『百万塔陀羅尼経（無垢浄光経）』に始まると言われています。

平安時代中期～室町時代末期には、寺院を中心として、仏書や漢籍が印刷されていました。これらを、特に古版本と呼びます。

室町時代末期から江戸時代初期のごく短い期間には、銅活字・木活字を用いた古活字版が隆盛を見せますが、寛永期（1624～1644）以後は、書肆（本を出版・販売する店）の発展にともなって専ら整版が行われるようになり、商業出版時代における安定した方式となります。

古版本〈こはんぽん〉

江戸時代初期以降に盛んとなる版本と区別して、室町末期まで寺院を中心に出版されていた仏書や漢籍などを、特に古版本と呼びます。興福寺・春日大社で出された春日版、高野山の寺院で出された高野版、比叡山延暦寺で出された叡山版、京都五山や鎌倉五山などで出された五山版のほか、東大寺版・西大寺版・法隆寺版・東寺版・根来版・浄土教版などがありました。



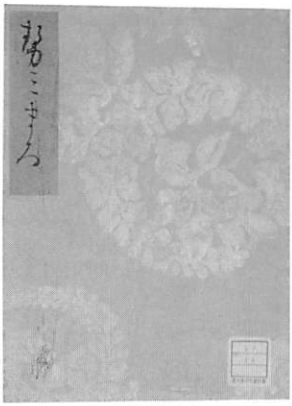
【67】春日版　大般若波羅蜜多経（鎌倉南北朝期刊）［ヨ2-43］

古活字版〈こかつじばん〉

室町時代末期から江戸時代初期のごく短い期間に行われた、銅活字・木活字を用いた版本。出版者により、キリシタン版・文禄勅版・慶長勅版・元和勅版・伏見版・駿河版・甫庵版・直江版・要法寺版・宗存版・嵯峨本などの名称があります。

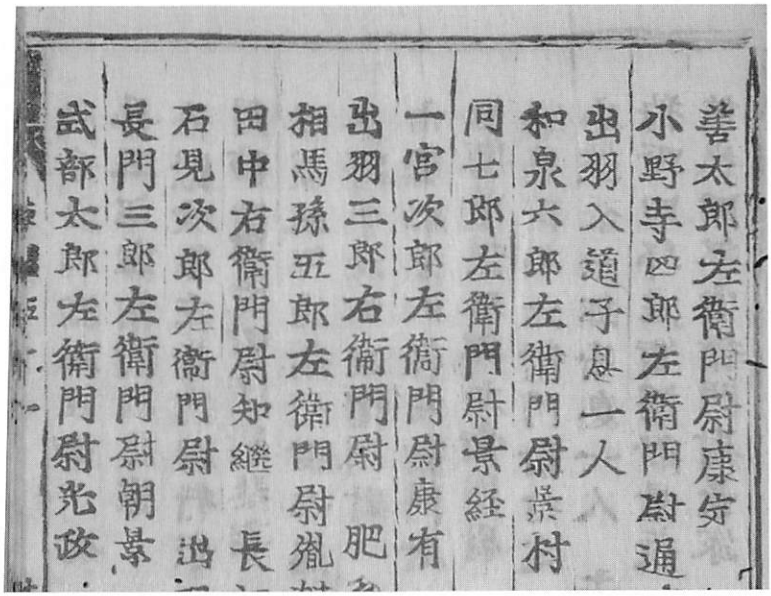
◎嵯峨本〈さがぼん〉

本阿弥光悦〈ほんあみこうえつ〉の流麗な書体やそれに類似した書体の版下によって刷られた古活字本。料紙や装訂も意匠を凝らしたものとなっています。京都の嵯峨に住した角倉素庵〈すみのくらそあん〉が出版に関わったため、この呼称があります。慶長一三年（1608）刊の『伊勢物語』を嚆矢とし、『方丈記』『百人一首』『徒然草』『観世流謡本』などが作られました。



【68】蝉丸（慶長期1596-1614刊古活字版）［タ7-16］

◎慶長期（1596～1615）の古活字版



【69】伏見版　東鑑（慶長一〇年1605刊古活字版）［ヤ2-147］

◎寛永期（1624～1644）の古活字版

【70】寛永行幸記（寛永初期刊古活字版）［ヨ2-57］

整版〈せいはん〉

薄い紙に本文を清書して版下〈はんした〉を作り、それを裏向きに板に貼り付けて上から彫刻し、その板（版木と言います）に墨をつけ、上から楮紙などをあてて馬棟〈ばれん〉でこすって印刷し、製本したもの。寛永期（1624-1644）以降、古活字版にかわって再び盛んになり、江戸時代の商業出版文化を支えるものとなりました。この技術により、挿絵が簡単に入るようにもなりました。

【71】本朝醉菩提全伝（文化六年1809刊）［ナ4-635］

◎**覆古活字版**〈ふくこかつじばん〉

古活字版の本を版下に使い、整版の技術で刷った版本。古活字覆刻整版〈こかつじふっこくせいはん〉とも呼びます。慶長期（1596-1615）～寛永期（1624-1644）に出版された古活字版を版下にし、寛永年間に多く作られました。

※整版である本書と、古活字版である前掲【70】を比較参照して御覧ください。

【72】寛永行幸記（寛永期1624-1644刊）［ヨ2-32］

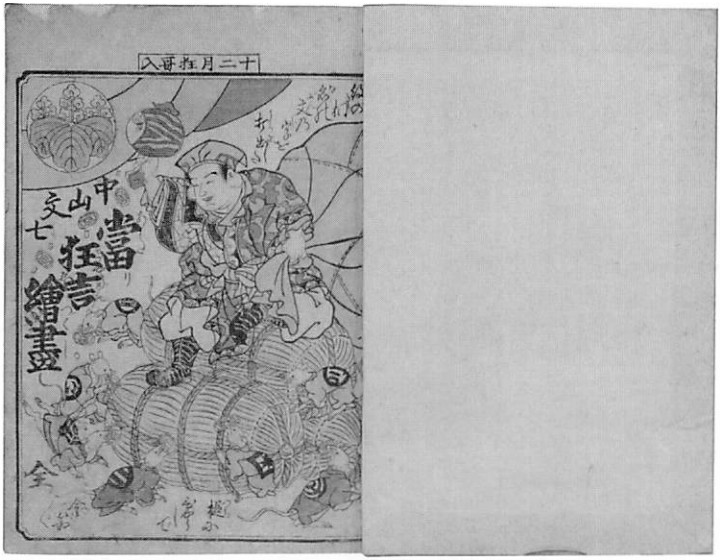
◎**丹緑本**〈たんろくぼん〉

版本の挿絵に赤・緑・黄の三色の淡彩を手で加えたもの。寛永年間（1624-1644）から万治年間（1658-1661）にかけ上方で刊行されました。軍記物・お伽草子・古浄瑠璃などに多く見られます。

【73】きりかみ曾我〈切兼曾我〉（寛永頃1624-1644刊）［タ7-29］

◎**カッパ摺**〈かっぱずり〉

油をひいた厚紙を切り抜き、その切れ目から、下においた印刷面に彩色を施したもの。



【74】当狂言絵尽（江戸後期刊）［ナ7-1］

◎**多色摺**〈たしょくずり〉

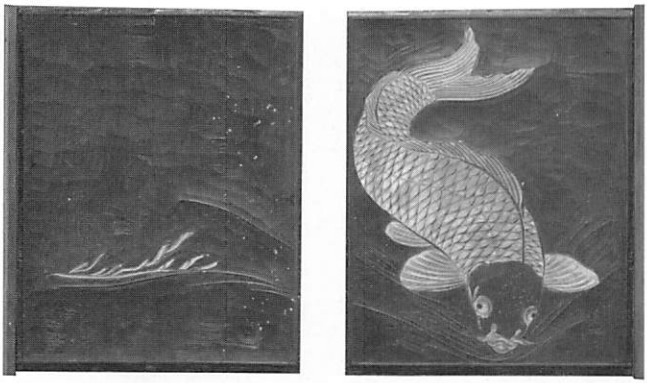
複数の色を重ねて摺られたもの。江戸時代後期には、木版手摺り技術の発達によって、版本の口絵や絵本に重ね刷りが行われました。

【76】偐紫田舎源氏（天保三1832～一三年1842刊）［ナ4-229-1～38］

▼参考▲

版木〈はんぎ〉

整版を作成するために文字や絵を彫りつけた板。薄い紙に、本の一丁分を清書して版下を作り、これを裏向きにして板に貼り付け、その上から彫りました。



【77】魚貝譜　版木（享和二年1802刊）［ヤ8-180］

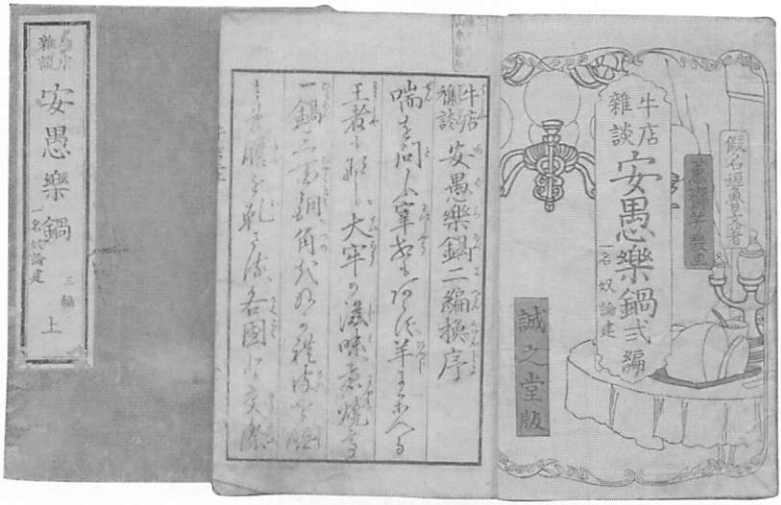
近世木活字本〈きんせいもっかつじぼん〉

江戸時代後期の、木活字による印刷本。幕末、私塾や個人の少部数出版として行われました。

【78】落窪物語（寛政六年1794刊）［サ4-56］

近代木版本〈きんだいもくはんぼん〉

明治時代になって行われた整版本。



【79】牛店雑談安愚楽鍋（明治四～五年刊）［ハ4-4］

近代金属活字本〈きんだいきんぞくかつじぼん〉

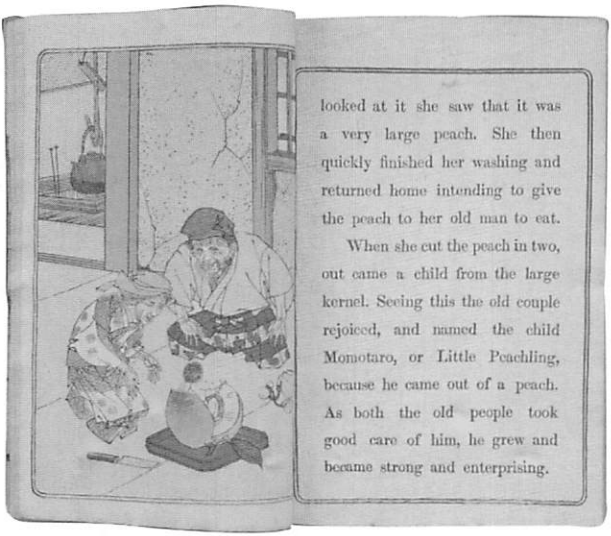
明治時代になって行われた金属活字による印刷本。洋装活字本が主となりつつも、旧来の版の形式をとどめた和装活字本も多く刊行されました。

※本書は、初編のみ活版で出され、二編からはすべて木版になりました。

【81】高橋阿伝夜刃譚（明治一二年刊）［ハ4-163］

チリメン本〈ちりめんぼん〉

各頁見開きに、木版手摺りの優雅な彩色絵を入れた、横文字（英文・独文など）の本。用紙に絹の縮緬〈ちりめん〉を連想させるやわらかく加工した縮緬紙を用いています。明治中期から大正にかけ、外国人の土産用に刊行されました。



【82】JAPANESE FAIRY TALE SERIES（明治期刊）［48-38］

C　本以外の資料

文字や絵の書かれた資料・印刷物のなかには、本という形態を取らないものも多くあります。

古筆切〈こひつぎれ〉

写本の一部を切ったり剥いだりしたもの。室町時代の後半ごろから、茶室を飾るために、歌書・物語・経などの古写本が裁断され、屏風〈びょうぶ〉に貼られたり掛軸〈かけじく〉に仕立てられたり手鑑帖〈てかがみちょう〉に貼り込まれたりしました。由緒ある古写本の多くが分断されたわけですが、その反面、貴重な典籍の一部を残存させる結果ともなりました。

※切の右側の小紙片は、江戸時代の古筆見〈こひつみ〉がこの切の筆者や内容を極めた鑑定書で、極札〈きわめふだ〉と言います。

【83】未詳私家集切（鎌倉後期写）［11-14］

短冊〈たんざく〉

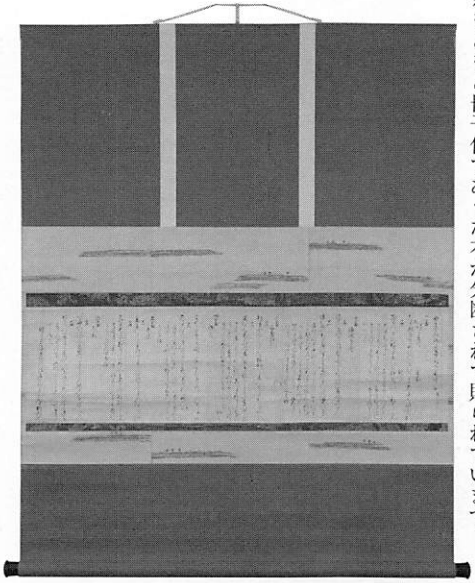
懐紙〈かいし〉（歌会における詠歌の清書用料紙）をほぼ八等分したもので、通常、縦約三五センチ、横約五センチほど。鎌倉時代末期には既に、詠歌の清書用料紙として用いられていたようです。詠者の署名がある場合には、その人物の真跡を伝える一級資料になります。無地の短冊のほか、上下に藍色の雲形模様を漉き込んだ雲紙（打曇り）短冊、金銀泥の下絵をほどこした短冊、箔や砂子を散らした短冊などがあります。

【84】国学者詠短冊［11-4］

掛物〈かけもの〉・**掛軸**〈かけじく〉

書画を掛けて鑑賞・鑽仰するために、本紙に裏打ちを施し、周囲に布や紙で縁を作って、その上部を壁面に掛けられるように軸装したもの。仏画や、天皇・高僧・歌人の肖像画、名筆家による墨跡、古筆切などが貼付されました。

※もともと冊子体であった本が分断されて貼られています。

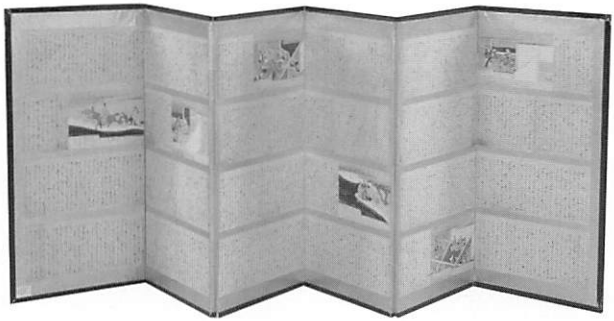


【85】水無瀬釣殿六首歌合［ヨ6-3］

屏風〈びょうぶ〉

風をよけたり部屋を間仕切りしたり座を設けたりするための家具。唐絵や大和絵が直接描かれたり、漢詩や和歌などを書いた色紙や短冊が貼り付けられたりしました。また、分断された古写本の一部が貼られることもありました。

※お伽草子『しづか』の写本（奈良絵本）が分断されて貼られています。



【86】しづか［貴重書99-17］

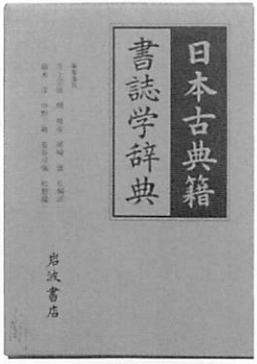
一枚刷り〈いちまいずり〉

一枚の紙に印刷されたもの。片面刷りと両面刷りとがあります。社寺の歴史や御利益などを記した「略縁起〈りゃくえんぎ〉」、人物・事項などを位付けした「芝居番付〈しばいばんづけ〉」「長者番付〈ちょうじゃばんづけ〉」、なぞなぞや双六〈すごろく〉、暦〈こよみ〉や地図など、さまざまな種類があります。

【87】城崎温泉寺観音并ニ湯之縁起［19-23］

【参考文献】
◎井上宗雄・岡雅彦・尾崎康・片桐洋一・鈴木淳・中野三敏・長谷川強・松野陽一編集『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店）
◎川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』（雄松堂出版）
◎藤井隆『日本古典書誌学総説』（和泉書院）
◎廣庭基介・長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』（世界思想社）
◎橋本不美男『原典をめざして―古典文学のための書誌―』（笠間書院）
◎中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』（岩波書店）
◎川瀬一馬著・岡崎久司編『書誌学入門』（雄松堂出版）
◎山岸徳平『書誌学序説』（岩波書店）
◎藤本孝一『日本の美術No.436 古写本の姿』（至文堂）
◎藤本孝一『日本の美術No.454 『明月記』―巻子本の姿―』（至文堂）
◎山本信吉『古典籍が語る―書物の文化史―』（八木書店）
◎櫛司節男『宮内庁書陵部 書庫渉猟―書写と装訂―』（おうふう）
◎橋口侯之介『千年生きる書物の世界 和本入門』（平凡社）
◎遠藤諦之輔『古文書修補六十年―和装本の修補と造本―』（汲古書院）

※本展示「和書のさまざま」は、当館ホームページでも御覧いただけます。http://www.nijl.ac.jp/~koen/wa-1.htm
（「催し物」ページ内「ヴァーチャル展示：和書のさまざま」）



※次回予告

人間文化研究機構連携展示

幻の博物館の〝紙〟

―日本実業史博物館旧蔵コレクション展―

平成十九年五月二十八日（月）～六月十五日（金）

土曜開室、日曜休館

※本書の編集には加藤昌嘉准教授の手を煩わせた。銘記して感謝したい。

※表紙は龍門文庫覆製叢刊『雑念集』の書影である。特殊な形態の見本として許可を得て口絵とさせて頂いた。

※裏表紙は著名な中国の蔵書家陳鱣の蔵書印である。図像の蔵書印は我が国には稀であろう。林申清編『中国蔵書家印鑒』による。

〒一四二―八五八五
東京都品川区豊町一―一六―一〇
国文学研究資料館　普及・連携活動事業部
電話　〇三―三七八五―七一三一

（平成十九年四月十六日改訂）

ISBN978-4-87592-126-4

平成十九年四月十六日（月）～五月十八日（金）

於　国文学研究資料館二階展示室